

親鴨会 2020年11月メッセージ 「暇の効用」

今年の秋は心なしか日暮れが早いように感じます。街を歩くと、人々のマスク姿以外は去年の風景とさして変わらない様に思えますが、まだまだ安心できません。

4月以降、自粛の時間を活用して読書三昧の日々を過ごしました。思えば、本好きが高じて、2004年から高校の同級生が主宰するオンラインサイトに毎月書評を個人的に書き始めました。当時、インターネットを利用した情報発信にはさしたる期待はしていませんでした。しかし、書評をサイトに掲載した数日後、著者の方から「是非会いたい」との連絡が有ったり、ブラジルのサンパウロで発行されている日本語新聞の「ニッケイ新聞」から書評を転載したいとの連絡を受けたりしました。時間も距離も超えて未知の他人が結びつくインターネットの可能性を実感させられました。ただ、在職中はリスク管理のためにペンネームを使っていたのを思い出します。

このコロナ禍でこうした通信利用技術がますます大きな役割を果たし始めたと思います。ネット通販やデリバリー・サービスによる日々の買い物のための外出の最小化、電子マネーや電子決済の定着による非接触の確保、行動追跡システムによる感染トレース、SNS やインターネットによる非対面の情報共有や情報発信、オンライン会議による距離の制約排除など。われわれが初めて体験したコロナ禍で行動が制約された期間だからこそ利用がどんどん進んだと思います。かくいう私は、年相応のネット活用はしているつもりですが、先日、二子玉川の商店街で新しいカフェが開店していたので入ったら、「当店は電子決済だけで現金は使えません」言われました。もはや「電子決済も出来ます」ではなくて「電子決済しかできません」という時代に入ったことにいささか驚きました。社会の変化が着実に進んでいます。

情報化社会において、人との結びつきの多様性・即時性が保たれる価値は大きいと思います。同時に、人と人が対面して直接会話する価値は単なる楽しさだけではなく、信頼や互助の原点でもあります。両方の価値を上手く享受したいという思いが湧いてきます。

親鴨会会長
内池 正名